

# 絵になるまち・育むまち・笑顔のまち！ オール体制で挑むよろこびのまちづくり

## 個性豊かな4地区が醸す 新たな時代への胎動

埼玉県久喜市は平成22年3月、旧久喜市、旧南埼玉郡菖蒲町、旧北葛飾郡栗橋町、同鷺宮町との1市3町の合併により、新市としての歴史をスタートさせ、平成29年3月に合併8年目を迎える。

この新生久喜市は、商業都市としての集積を重ねてきた久喜地区、戦国時代末期に築城された菖蒲城址を有する菖蒲地区、日光街道の宿場町として栄えた歴史を持つ栗橋地区、関東最古の大社・鷺宮神社が構える鷺宮地区など、各地区の性格がそれぞれ色濃く出ている点に特徴がある。その4地区が合併したことで、久喜市は現在、人口約15万4000人、面積約82km<sup>2</sup>の規模を持つに至り、埼玉県東北部の拠点都市としての位置付けが、より明確になったといえる。

さらに、今後、拠点都市としての久喜市の発展を後押しするだろう要素がもう一つある。埼玉県東北部で随一と目される交通便利性の高さだ。

「久喜市にはもともと東北道、国道4号、国道122号などの広域幹線道路がありましたが、平成27年10月31日に、埼玉県内の圏央道が全線開通したことにより、関越道・中央道・東名高速などの高速交通網にも直結するようになりました」

そう語るのは田中喧二・久喜市長だ。

「加えて今年（平成29年）2月26日には、茨城県内の圏央道境古河IC〜つくば中央IC間が開通する予定です。これによって久喜市から常磐道や東関東道、成田空港方面へのアクセスが格段に向上します」（取材は2月中旬。境古河IC〜つくば中央IC間は予定通り2月26日に開通した）

道路交通網だけでない。久喜市には現在、JR宇都宮線・東武伊勢崎線・東武日光線



たなか けんじ  
田中喧二  
久喜市長

の3線が乗り入れ、5駅が立地しているが、平成13年12月から宇都宮線で運行開始された湘南新宿ライン（久喜〜新宿51分）に加え、平成27年3月からは上野東京ライン（久喜〜東京52分）が運行開始。久喜市は鉄道網でも上野・東京・新宿・池袋など都心の大ター





地域を挙げて待望していた圏央道開通式(桶川北本IC～白岡菖蒲IC)

ミナルと直結することになった。  
久喜市はいわば、道路交通・鉄道交通の両面において、都心部と直結するだけでなく、関東・東海・北信越・東北方面と都心部を結ぶ中継点、貴重な結節点(クロスポイント)の役割を果たしているのだ。



圏央道・白岡菖蒲ICの全景

このように交通環境に恵まれた久喜市は、圏央道沿線の産業基盤整備に関する埼玉県の基本方針「田園都市産業ゾーン基本方針」の先導モデル地区として「菖蒲南部産業団地」「清久工業団地周辺地区」を整備した。今回の取材では両産業団地も見せていただいたが、各種産業を支える物流基地が多く設けられている風景が、ひととき印象的だった。  
さて、旧久喜市で市長を4期(平成9年～22年)務め、1市3町の合併を果たした田中市長は、新生久喜市でも引き続き市長に就任(現在2期目)。総計約20年間にわたって久喜市政を牽引してきた。



24時間、365日救急医療に取り組む新久喜総合病院は利根保健医療圏の中核病院(久喜地区)

その田中市長が合併時から力を傾注してきた重要施策の一つが、「新市の均衡ある発展のため、4地区のバランスを考慮しながら、4地区の持つ地域特性を生かした一体的なまちづくり」(田中市長)だという。さらに「市民サービスのさらなる向上、圏央道の開通を見据えた企業誘致の促進、交通弱者の便宜を図るデマンド交通の運行、中核病院の誘致をはじめとする医療環境の拡充化、新市の一体化を促進する幹線道路の整備など、いずれも合併によって生じたスケールメリットを活用する諸事業」(田中市長)の推進だった。



## 利根川中心の交通網・ 圏央道中心の交通網

これらの事業のほとんどが実現した現在、その最大の推進源の一つとなった、恵まれた交通環境を、歴史的な観点から改めて振り返ってみると、久喜市自体が持つ地域資源としての「土地の持つ力（地勢、土地柄）」の大きさを行政に生かしてきた事がまざまざと浮き上がってくる。

例えば、関東地方北西部に位置する埼玉県は、東京都・群馬県・栃木県・千葉県・茨城県・山梨県・長野県の1都6県に囲まれた、典型的な内陸部の県だ。さらに埼玉県東北部に位置する久喜市は周囲を10市町村に囲まれている。そのうちの1市1町は茨城県の自治体（古河市、五霞町）だ。茨城県と接しているのは栗橋地区で、利根川および支流の権現堂川（元利根川・本流）を挟み、古河市および五霞町と接している。

この栗橋地区は江戸時代、日光街道の宿場町として栄えた。同時に利根川本流の流域のまちとしても、活発な水運を通じて大いににぎわった歴史を持っている。現在の久喜市を構成する各地区も、久喜市の周囲に接する数多くの地域も皆、その恩恵をさまざまな形で、歴史的に受けてきた。

そして現在、久喜市の交通の要衝ぶりをさらにバージョンアップする存在としての圏央

道と、近代以前の関東地方の物流の大動脈だった利根川の存在とを重ね合わせると、非常に興味深い類似性、共通性が浮かび上がってくる。例えば圏央道について、久喜市の公式サイトでは「首都圏における道路交通の円滑化、環境改善や、沿線都市間の連絡強化等を目的とした、都心から半径およそ40～60kmの位置に計画されている総延長約300kmの環状の自動車専用道路」と説明されている。そして久喜市内の圏央道には、八王子方面に近い西側から菖蒲PA、白岡菖蒲IC、久喜白岡JCTがあり、久喜白岡JCTでは東北道に接続している。

前述のとおり平成27年10月31日に桶川北本IC～白岡菖蒲IC間が開通し、埼玉県の圏央道（58・4km）が全線開通したことで、久喜市から都心を経由せず関越道・中央道・東名高速にアクセスできるようになり、その所要時間は大幅に短縮された。例えば、久喜白岡JCTから神奈川県海老名JCTまでの所要時間は、圏央道開通前の約130分から約67分へと半分強にまで短縮されている（従来は東北道・首都高・東名高速を経由）。

圏央道の存在が果たしつつある交通網の発達と同様の出来事が、江戸時代初期、利根川を舞台に行われた。

江戸時代以前の栗橋の横を流れ、江戸湾に直接注いでいた利根川本流は、徳川幕府の成立と同時期に大改修（付け替え）工事が行われた。利根川東遷事業と呼ばれるもので、利根



久喜市はいちご、梨などの名産地

川本流は栗橋の手前から大きく東に迂回し、現在の千葉県、茨城県方面に流路を変えることで、ほかの大河川とも次々につながっては連動し、関東一円の大物流ルートを形成するようになる。

栗橋の横を流れていた旧利根川本流は権現堂川と名称を変え、利根川の支流へ転換していくが、栗橋経由で権現堂川・江戸川を経由して江戸に至る水路としても、引き続き船運は活況を呈した。

日光街道と併せて、江戸に直結する流路、千葉・茨城方面へつながる流路が連係するその様子は、まさに現代の圏央道を中心に、道路網と鉄道網が縦横に連係する状況をほうふ



合併5周年を祝う式典・イベントには多数の市民が来場



すっかり土師祭の名物となった「らき☆すた神輿」



アニメキャラの絵馬が物語る「アニメの聖地・鷺宮神社」(鷺宮地区)

つとさせる。

## 絵になるまち、育むまちへの高評価

久喜市では合併5周年を目前にした平成26年4月、シティプロモーション課を設置。前年末に策定した「久喜市シティプロモーション推進指針」を基に、田中市長の2期目の市政のスタート時から活動が開始され、積極的なシティプロモーションを展開してきた。

「シティプロモーション課の設置には、先の目標の一つとして平成27年の合併5周年の記念イベントを企画・実行するというミッションがありました。しかし、それ以上に重

要な目標として、少子高齢化および人口減少化時代の到来に備えて、新たな定住化の促進、例えば子育てのしやすいまちであることなどをアピールする各種発信事業の実行も想定しておりました(田中市長)

シティプロモーション課が実施する久喜市情報発信の重点ポイントは主に「絵になるまち」「育むまち」「笑顔のまち」の3つのカテゴリーに区分されている。

まず「絵になるまち」は、桜、れんげ、藤、ポピー、菖蒲、ラベンダー、萩、コスモス(市の花)などの花々、花にまつわる各種イベントなどの紹介、四季折々の祭礼などの紹介のほか、「アニメとキャラクターを使った取り組み」がユニークだ。

この取り組みの主要舞台は鷺宮神社で知られる鷺宮地区。関東最古の大社・鷺宮神社は人気アニメ『らき☆すた』の主要舞台となっている。そのためアニメファンが全国から折に触れ集まり、ファンの間では鷺宮神社とその周辺は「アニメの五大聖地の一つ」と位置付けられている。

実際、境内の絵馬掛け所には、アニメのキャラクターを手描きした絵馬が多く飾られている。また鷺宮神社では毎年9月に関東最大級とされる神輿が渡御する例祭「土師祭」が開催されているが、この祭りには近年、アニメのキャラクターが描かれた手造りの「らき☆すた神輿」も登場し、全国から集まったファンやコスプレイヤーたちの喝さいを





久喜市の子育て支援の充実が高評価(鷲宮地域子育て支援センター)



合併後の一体化に効果のあった市民懇談会

浴びている。

またこうしたアニメ関連のムーブメントとともに、久喜市のイメージキャラクター「しょうぶパン鬼(き)」「来久(ライク)ちゃん」の人気も急上昇しており、市内で開催されるさまざまなイベントに出演しては、親子連れやファンを喜ばせている。

「育むまち」の取り組みとしては、優れた交通環境とともに、「子育てのしやすいまち久喜」の情報発信、それを裏付ける各種の子育て支援施策が実施されている。

「子ども医療費の中学3年生までの無料化などの助成、休日の夜間や、年末年始等

における診療体制の構築、待機児童解消を目指す保育の量的拡充、ファミリー・サポート・センターの拡充や各種助成金の整備などのほか、不妊に悩むご夫婦の経済的な負担を軽減するための不妊治療サポートも、子育て世代から好評をいただいております」(田

中市長)

その成果は例えば日本経済新聞社及び日経BP社が昨年実施した調査において「共働き子育てしやすい街・上位50自治体」全国48位にランクされたことなどからも、具体的に示されているといえる。

子育て支援をはじめ、久喜市が市民の生活

密な取り組みも、その一環といえるだろう。

## 喜びがたくさんある「うれしいまち」

久喜市のシティプロモーション活動で最も特徴的なのは、「笑顔のまち」の各種取り組みだ。注目されるのは動画(久喜市PRビデオ)による「笑顔の発信」(田中市長)だろう。中でもユニークなのは、老若男女の市民や久喜市に勤務する人々、小中学校の児童・生徒たちや先生、市職員や市長に至るまでが出演した「クッキーダンス」の動画だ。市の歌「笑顔のまち永遠なれ」に合わせて、みんながオリジ

環境の向上に資する各種制度を整備するに当たっては、合併以来、田中市長が常に深く配慮してきた「市民目線」への強い意識が縦横に張り巡らされている。

合併後の市民の一体化などを図るために実施してきた「市民懇談会」の開催、「久喜市自治基本条例」の策定、市民活動推進補助金の交付事業、4地区それぞれ地域課題の解決などを旨とする「地域会議」の設置に至る、市民協働の推進に向けた各種の綿





女子高生たちの菓子力と笑顔力が問われる!?クッキー甲子園



老若男女の市民が参加した笑顔のクッキーダンス！

ナルダンスを踊って笑顔を発信するというコンセプトの動画で、昨年9月から10月に行われた「1000人クッキーダンス」の撮影には、目標の1000人を遥かに超える3058人もの人々が参加したという。このPR動画には、平成27年度に作成した「1000人ワンカット撮影」に引き続き女優の鶴巻星奈さんが主演を務め、市内各所でのクッキーダンス撮影に参加した。

久喜市および周辺自治体の高校の調理部等の生徒たちが参加するクッキー（お菓子）づくりの祭典「クッキー甲子園」、昨年3月に第1回目が開催された「よろこびのまち久喜マラソン」（今年も3月19日に開催）などとともに、久喜市の市名にちなんだクッキー、そして「よろこび」にちなんだイベントの数々は確実に、参加する市民、見守る市民たちに笑顔をもたらしている。

ちなみに「1000人ワンカット撮影」をはじめとする久喜市のPR動画は「平成28年度全国広報コンクール」（日本広報協会主催）において、広報企画部門で入選を果たしている。

「久喜市が笑顔の発信にこだわるのは、市名に喜の文字が入っていることも大きいのですが、もちろんそれだけではありません。少子高齢化、人口減少が不可避的に進む日本および各自治体の未来には、苦しい要素もさまざまな出てくることでしょう。しかし、それらを克服し、最終的に明るい未来をもたらすのは国民の笑顔であり、市民の笑顔の力だと思



重要な笑顔発信コンテンツの一つ「よろこびのまち久喜マラソン」

います。そんな思いを久喜市から発信することで、受信された方たちに笑顔がもたらされるのなら、とても嬉しく思います。さらに久喜市に住んでみたいと思ってくださる方がそれで少しでも増えたら、言うことはありません（笑）（田中市長）

市内に長く立地した東京理科大学の跡地の活用問題や、医療資源に関する地域医療の課題など、久喜市においても全国の自治体と同様、直面する懸案は少なくない。しかし、久喜市はそれらをも笑顔の力で軽やかに克服していくのではないか。そんな温かな思いと期待感に包まれた、楽しい取材であった。

（取材・文＝遠藤隆／取材日平成29年2月9日）